
皇帝再起

鉦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝再起

【Nコード】

N4532M

【作者名】

鉞

【あらすじ】

インフルエンザで死んだ俺は気が付いたら別の人間に転生していた。転生前の記憶もある、何が何だかわからないけど兎に角二回目の人生も終了、かと思ったら三回目！？勘弁して下さい（泣）

プロローグ（前書き）

恋姫無双で書いてみた。ゲームやったこと無いので漫画をベースに進める予定。

プロローグ

輪廻転生、解りやすく言うなら死んだらまた新しい生命体に生まれ変わるという概念だ。無神論者だった俺は神という曖昧な存在よりもこちらを支持していた。最も、それだってこういったものも有るだろうといった程度のものである。つまりは考えたことがなかったのだ、実体験するまでは。

ある日俺は死んでしまった。死因は多分病死、新型インフルエンザにやられてぽっくりというわけだ。この不景気な世の中で就職も決まり入社式を来月に控えていた矢先のことだった。

さて、そんな訳で死んでしまった俺なんだが気が付いたら赤ん坊になっていた。当初は夢か何かと思っていたが時間が経つにつれ生まれ変わったのだと思うようになった、諦めたともいうけどな。そんな生まれ変わった俺だが前世と今世の文化レベルの格差に戸惑った。移動手段は徒歩か馬、お偉いさんは輿とかに乗っているが基本は前の二つである。カルチャーショックというやつだ。

月日は流れ俺はこの世界では爺さんという年齢になった。飛びすぎ？俺が言いたくないから良いんだよ。どうしても言うなら史書を見ればいい。どうやら俺は歴史に名を残したあの人物に転生したらしいからな。勿論、個人的に駄目だろっていう部分は直したよ？そのおかげか国庫には金がタツプリと残ってるし民衆からの支持率も悪くない。逆に臣下の者たちは不満そうだ。徹底的に賄賂や隠し財産等を叩いたためだろう。さっさとくたばれといった視線を稀に向けてくる。そうそう、結局子供は作らなかった。俺が死んだ後に臣下の人形にされたら可哀想だしこんな陰謀渦巻く所に放り

出すのも気が引ける。まあ、史実通りなら俺が死んだ後国は割れるんだがな。

それから暫くして俺は床に伏せることが多くなった。間違いない死期が近づいているのだろう、以前に比べれば大分ましな状況だが死ぬのはやはり恐い。それでも、この老いた体にはもう起き上がるような力はない。控えている医官の表情も優れない。いよいよかと覚悟を決めた俺だがふと以前から疑問に思っていたあることが頭をよぎる。

「何で項羽と劉邦が女だったんだろう？」

史実では男のはずだったんだが。そんな、今となってはどうでもいいことを考えながら俺は目を閉じる。医官が何か言っているが生憎と聞き取れない。そのまま、やって来た睡魔に身を委ね俺は眠りについた。永眠という名の眠りに。

この日、秦国を造り自らを始皇帝と称した男がその生涯を終えた。終えた筈だった。しかし、

「ばぶ？（あれ？）」

どうやら、彼の人生はまだまだ終わらないようだ。

ブログ（後書き）

ブログでした。色々と拙い文でしたがアドバイスとか頂けたら嬉しいです。それでは次の投稿までさようなら。

一話

三度目の生はなんともくそつたれな始まりだ。後漢、靈帝のおさめるこの国に生まれた俺は心底そう思った。俺の父は宮廷で働いている。それも十常待としてだ。幼い頃から父は俺に自分のことを自慢げに話していた。天下は我々にありだとか、何進一派の顔が見ものだったとかそういう話ばかりだ。一度政について聞いて見たのだがはぐらかされた。だがそのとき目の見えはあった。前世、俺が始皇帝になりたてだったころ無能な部下がよくしていた目だ。酒や女に時間をかけ政を疎かにしていた者たち、それと同じ目をしていた。何度か父に連れられ他の十常待の者とも顔を会わせたがいつもこいつも私腹を肥やし酒と女で顔がてかっていた。劉邦は、春香（劉邦の真名）が創りたかったのは今な国ではない。アレはいつも言っていた。

「誰もが笑える世界、それを私は創りたいのです」

笑いながら言う彼女の顔は決意に満ちていた。そして彼女は国を興した。だが、彼女には足りないものがあつた。確かに彼女は人の上に立てる人間だ。しかし、それはあくまでも将としてだ。王としての天命は彼女にはない。事実、皇帝は早死にが続き幼帝の補佐と称した宦官が蔓延り国力と権威は落ちていった。最も、項羽が国を興したら今以上に悲惨になっていたかもしれないが。

さて、それから数年が経ち俺は宮廷で父の補佐として働いていた。決意したと言っても子供にできることは無い。父の不正の証拠は確保したがそれだけだ。流石に父も狸だったが俺にとってはヒヨコだ。妖怪レベルの重臣たちを纏めあげていた実績は伊達ではない。最近是他の十常待の不正の証拠も手に入れいつでも彼奴等を失脚に追い込むことができる。しかし、それでは足りない。やるなら徹底的に

やる、下手な情けは後々自分の首を絞める。そんなときだった。父から董卓という名の娘の話を聞いたのは。

話によるとだ。何大將軍の一派に宦官排斥の動きがあるらしい。父たちもむざむざ殺される訳もなく逆に大將軍を暗殺しようとしているらしい。しかし相手は出地はどうあれ大將軍だ当然騒ぎになる、そこで父たちは董卓に全ての罪を擦り付けようとしているのだ。実にヘドが出るがこれは利用できる。

準備も整い後は父たちの決行に併せて動くだけだ。だけだったのだ。がここで邪魔が入った。黄色い布を巻いた民の反乱、後に言う黄巾の乱である。王の前の人生で知ってはいたが何分昔のことだ、聞くまで思い出せなかった。この反乱により王朝の権威は落ちる。そして始まる戦乱、天下三分に治まるとは言え王朝は潰える。それが正史だ。しかし今ならまだ間に合うかもしれない。よって俺は必死に父を説得した。宦官の中から黄巾党へ内通していたものがいたのは幸いだった。これが明るみになれば宦官の力は落ちる、そう言う父はようやく重い腰を上げ他の十常待もそれに習い靈帝へ進言し軍を派遣した。官軍と各州の州牧や太守の迅速な動きにより発起したてだった黄巾党は一溜まりもなく壊滅した。張角、張宝、張梁の首謀者も捕らえられ死罪が確定したのだがここで父たちが色を出した。張三姉妹は旅芸人、今で言うアイドルをやっていたため容姿は良い、それを気に入った宦官が自分の物にしようとしたのだ。張三姉妹は今回の首謀者ではあるが顔はあまり知られていない。という彼女たちは興業を真名で行っており黄巾党の首謀者と〃と考えられていないのだ。ここで張三姉妹が宦官に引き取られればどうなるかなど明らかだ。

流石に今回の件は許せるものではないが供述によればどうにも彼女たち自身には反乱の意思はなく周りの暴走らしい。そのままあれよあれよというまに黄巾は大きくなり今回の事件に繋がったらしい。我ながら人が良いと思いつながら彼女たちを助ける為の根回しをする。そして、それから数カ月後。

「陛下が逝去されました」

靈帝の死、同時に動き出す何大將軍一派と宦官たち。そして、

「さあ、ごみ掃除の始まりだ」

二話（前書き）

一年弱ぶりかあ、社会人って疲れるね

二話

さて、親父達の計画（といってもかなりお粗末な）まで後数日というところのある日、俺はというと三人の女性を前にしていた。女性達の名前は櫛植、朱俊、皇甫崇といい漢王朝を代表する女傑である。

「わざわざ私たちを集めてなんのようだ？」

「それにつきましてはまずこちらをご覧ください」

朱俊の問いかけに俺は袖の中から竹管を一つ取り出し渡す、いぶかしげにそれを受け取った彼女は軽く目を走らせ次の瞬間には目を見開いた。

「どうした？」

急に黙った彼女を不信に思ったのか、皇甫崇が声をかける。それに対する返答は竹管を渡されることだった。

竹管に書かれているのは父を始めとする十常侍による不正の証拠、もちろん父達が必死に隠していたものだ。

「これはあくまでも一部です、末端までは手が回りませんでした。十分なものでしょう」

「……それでこれを私たちに見せてどうするのだ？何大將軍に庇護でも求めるのか？」

「近々暗殺される人に求める物なんてないですね」

サラッと言った大將軍暗殺、それに反応が返ってくる前に俺は続ける。

「現在この洛陽には大將軍側に位置する諸侯が多くいます、そんな中で大將軍を暗殺しよう物なら父達は諸侯達に報復されるでしょう」

「それで、私達にお父さんを守ってくれと？ならお断りよ」

そう言う皇甫崇だが残念なことに的外れである、そもそも助けを求めるなら先の竹管なんて見せるわけがない。

「いえいえ、そんなことは頼みませんよ。というか私にとって父がどうなってもそれは身から出た錆という物、私がとやかく言うことではないですしね」

「なら、何を？」

「私としては父達がどうなるかに興味はありません、寧ろそのどさくさに紛れてよからぬことをたくらむ輩の方が心配ですね」

諸侯達が動けば必ずよからぬことを考える物が現れるだろう、その時危険なのは言うまでもなく陛下達だ。宝物も危ないだろうが両陛下、いや片方だけでも手中にしていれば担ぎ上げるとはたやすいだろう。故に両陛下の安全が第一である。

「私自身は両陛下下の教育係という立場でしかなくこの身を盾にする以外にないでしょう」

「だから我らに頼むと？我らが両陛下を傀儡にするとは考えないの

か？」

「思いませんね、あなた方がなにをやってきたか、調べはついてますからね」

下調べをした上でもっとも信頼できる者を選んだのだ、彼女たちのスタンスも把握済みだ。

「そういうわけで協力をお願いしますか？」

「ふん、お見通しという態度は気に入らんがいいだろう。陛下の御身は我等が守ろう」

「私は宝物庫を抑える」

「ならば私は城下の警邏をしましょう。宮中のごたごたに民を巻き込んだらいけない」

「感謝いたします」

とりあえずこれで陛下達は大丈夫だろう、さてそれで俺自身だが、

「自分はいつも通り陛下達のところにいるでしょう。この一件が終わった後はわかりませんが」

現在の俺の地位は親父の手によるところが大きい、その親父が失脚すれば今のままではいられないだろう。最悪は親父と一緒に斬首か、まあそうなったら仕方ないか。

さて先の会合から数日、ついに親父達が動いた。何大將軍は暗殺

され大將軍派の諸侯が宮中に雪崩れ込んだ。その時俺はちょうど陛下達の授業中だったので衛兵から話を聞いた後速やかに兵を纏めてこもった、暫くして扉を叩く音が数度し開かないとわかったのか今度は何か大きいもので扉を叩き始める。そして、

「ひっ」

扉が破られ入ってきたのは数十人の兵、鎧の色は官軍のそれではなくどこかの諸侯の兵だろう。

「何者か、ここをどこか知つての狼藉か？」

衛兵達はすでに剣を抜いており俺自身も自信の武器である鉄鞭を抜く、見たところ指揮官はおらずそこそこの衛兵がいるのも予想外だったのだろう、攻めてくる気配はない。

「ええい貴様等何をしている！さっさと陛下達を確保せんか！」

と、その均衡を破つたのは新たに現れた男、指揮官クラスか？

「先程も聞きましたが何者ですか？　ここを陛下達の執務室と知つてのことですか？」

「ふん、現在宮中は逆賊と我ら官軍が入り交じった状態だ、我らは陛下の御身を守りに来たのよ」

「そうですか、ではそのままそこで入り口を守ってください」

男の言い分に思わず笑いそうになる、言うに事欠いて官軍とはな。とりあえず正規軍がくるまでもたせるか。

「何だと？」

「何か不都合でも？」

「何故このままここにおらねばならん、陛下達を連れ一刻も早くここを離れるのが」

「下策ですね、貴方は今この宮中には兵が戦闘を行っていると言った。そんな中に陛下達を連れていけるわけがないでしょう」

この部屋はそれほど広いというわけではない。入り口も大きくなく多数が一度に攻めてくるには不向きだ。それに、

「さらに言うなら扉を強引に破る物達を陛下達が信用するはずありません。下がちなさい下郎」

「ぐぬぬ、言わせておけば小僧、大体貴様は何なのだ！？」

「これは申し遅れました。私は趙政ともうします」

俺が名乗ると男の顔に笑みが浮かぶ、まあだいたい予想できるが。

「趙政、知っているぞ。十常侍の一人趙忠の息子だろう？」

やっぱりかと内心ため息をはき俺はそれがどうしたと返す。返ってきた答えはやはり予想通りだった。

「ふん、逆賊の子に陛下達を任せることはできん。大方生き残りの十常侍に陛下達を引き渡すつもりなのだろう」

下らない、実に下らない事を喚く男。後ろにいる陛下達を不安なのか服を掴んでいる、我ながらよく懷かれたものだ。

「お前たち、さつさと奴らを皆殺しにし陛下達をお救いするのだ」

男の声を合図に始まる衛兵と諸侯の兵との戦闘が始まる、俺は陛下達を後ろに下がらせた。

「せ、政」

「大丈夫です陛下、お二人は私が命に代えてもお守りいたします」

そう笑顔で言ったところに衛兵を抜けてきた兵の一人がやってくる。振り上げられる剣、後ろでは陛下達が息を呑んだのがわかる、それに苦笑しつつ俺は鉄鞭を振るい剣を持つ手を打つ、

「があああ!？」

手の肉がこそげ落ち血が舞う、それを無視し更に顔に振るった、鼻が削げたがまあ自業自得だらう。

「ふん」

痛みのにたうち回る兵を蹴飛ばし鉄鞭を構えれる、こっちの生では戦闘経験はないが前世じゃ中国統一まで最前線にいたのだ、武将ほどの働きは出来なくても一般兵クラスなら問題なく倒せる。

「貴様！」

「おっと」

次にやってきた兵士の大振りをかわしカウンターで鉄鞭を振るい当たったのは目、眼球が潰れたなあれは、

その後も襲ってくる兵を鉄鞭で熨していく、具体的には顔面と手を重点的に。

床で呻く兵の数が十を越えた頃だろうか、扉から別の兵達が、官軍の鎧を身につけた者達が入ってきた。

「そこまでだ、全員武器を捨てる！」

入ってきたのは鎧姿の皇甫崇、ようやく彼女の姿に一瞬安堵したその時、視界の隅に例の男が剣を振りかぶるのが見える。完全な油断、迎撃には遅く避ければ陛下達に被害が及ぶ。

「死ねええ！」

「ぐっ」

被害は左手一本、肘から先を持って行かれた。痛みをこらえ鉄鞭を振るい男の手を打つ、悲鳴と共に剣を落とした男は後ろから迫る皇甫崇の剣にあっさりと絶命する。

「大丈夫か？」

「大丈夫な訳ないですよ」

軽口を言うも急速に失われていく血に意識が朦朧とし出す、これはヤバいかと考えながら俺は意識を失った。最後に見えたのは泣きながらこっちに走り寄る陛下達の姿だった。

三話（前書き）

短い（汗

三話

パカパカと軽快な音を立てながら歩く馬、その背に乗る俺は洛陽から離れるように移動していた。親父の失脚にあわせて俺も職を干されたんだ、本当は逆賊の子ということで首を跳ねられそうになったのだが皇甫崇達や陛下達の弁護で生き残った。宮中には三女傑の率いる官軍に加え父がスケープゴートに呼んでいた董卓がいる、話してみたら董卓はかなりいい人だった。これなら特に気にする必要は無いと洛陽から離れようとした俺のところに櫛植がやってきた、用件を聞くとなんでも昔の生徒が出世したようなのだが人手不足で大変らしい、そこで無職になる俺に応援としていてくれないかと言う。劉備と言えばあの劉邦の子孫という、まあかなり離れているので血はかなり薄いだろうが。まあとりあえず特にやることもなかった俺は協力してくれた恩もあるので引き受けたのだ。

そういうわけで現在俺は一人劉備のところに向かっていた、後家で侍女をしていた張三姉妹だが現在は洛陽で公演を行っている。先の一件で不安になった民への慰問と陛下達自らが企画したものだ。一度はあきらめていた洛陽での公演を行えるということで三姉妹も嬉しそうだった。

そうこうしているうちに俺は劉備の居城にたどり着いた、早速馬を預け城へ向かったのだが劉備は留守にしていた。今日中には戻らないので仕方なく街に繰り出した、父の財産は没収されたが俺自身のは丸々残っているので買い物でもしようと思ったのだが、

「どうしてこうなった」

「ふはははは、白昼堂々幼子を攫おうなど言語道断！ この華蝶飯面が成敗してくれる！」

道を歩いていたら子供にぶつかった、しかもその子供がスリだったので捕まえたら蝶の仮面をした変人に絡まれた、わけがわからないよ！？

「ふっふっふ、この華蝶仮面に恐れをなしたか」

しかも厄介なことにこの変人俺より強い、不味いな〜と思いつつどうしたものかと考える。目の前の変人はどうみても人の話を聞きそうにない、子供の方もいつの間にかいない、まあ財布はもう取り返したがらいんだが。

「いくぞ！」

「おっと」

いきなり仕掛けてきた変人、ギリギリでかわし仕方ないので鉄鞭を抜く、勝てはしないが憲兵がくるまで時間は稼げるだろう。

「ふっ、はあ！」

「のわ、危ないっ」

突き出される槍を鉄鞭をぶつけることでそらす、てか突きがマジで速い。ギリギリ対応できていたが徐々に押し込まれる。そして、

「せいっ」

「げ」

鉄鞭を弾かれる、くるくると回転しながら飛んでいく鉄鞭、その間

にも繰り出される槍に俺はとつさに近くにあった瓶を盾にする。ぶつちやけ気休めにもならないのだがいつまでたっても攻撃がこない。見れば、

「くつ、卑怯な」

槍を突き出した状態で歯ぎしりしている変人、なにがなんだかわからないが変人はこの瓶を攻撃できないようだ。かといって下手に動くこともできず膠着状態になる。と、

「そこまでだ華蝶飯面！」

「むむ！？」

現れたのは青竜刀を構えた女性、確かさつき城の中で見かけた女性だ。

「ぐぎぎ、仕方ない今日のところは引いてやる！」

そう言い走り去っていく変人、背の後を兵士達が追っていく。助かったのかと息を吐き助かる要因になった瓶を改めてみる、中には、

「メンマ？」

大量のメンマが入っていた。

変人が去り女性への事情の説明も終わった頃ようやく劉備が帰ってきた、早速櫓植からの手紙（といっても竹だから手竹？）を渡す、

「先生の推薦なら大丈夫だよ。うん、趙政さんこれからよろしくね！」

「こちらこそよろしくお願いいたします」

その後劉備から主だった面々を紹介される、その中に昼間の変人に似た女性を見つける。

「姓を趙、名を雲、字を子龍という。これからよろしく頼む」

「こちらこそ、ところで昼間「ち、趙政殿はメンマは好きかな！？」メンマですか？」

何だかはぐらかされた、まあこれから同僚になるんだから今は目を瞑るか。

紹介も進み最後、これまでの女性と違い男、青年の紹介になる。

「この人は私たちのご主人様で何とあの占いの天の御遣い様なの！」

「あゝ北郷一刀だ、よろしく」

劉備の紹介に目が細まる、名前からしてかつての現代日本の人間だろうか？ まあそんなことはどうでもいい、今は、

「失礼ですが劉備殿」

「は、はい何でしょう？」

差し出された手を無視して劉備殿に問いかける、無視された北郷は呆然とし一部の武将から不穏なものを感じる。だがこれだけは言わなければならない。

「劉備殿は謀反をお考えですか？」

四話（前書き）

短い、進んでない、風邪が治らない

四話

「劉備殿は謀反をお考えですか？」

「え？」

俺の言葉の意味が理解できなかったのか劉備が呆けたような声を上げる、周りの面々もいきなりな事態に咄嗟に反応できていない。そんな中一番初めに動いたのは話を振られた劉備だった。

「ど、どういことですか！？ 謀反なんて」

「おや？ 違いましたかな？」

「当たり前です！」

ふむ否定してくるか、まあ謀反するのと聞いてバカ正直に答える奴もいないか。

「貴様、いくら桃香様の恩師の紹介と言えど無礼がすぎるぞ！」

「そう言われましてもね、こちらとしては当然の疑問ですが」

「どいうことですか？」

殺気立つ武将達に事態がうまく飲み込めていない劉備と軍師達、まさか本当に気づいていないのか？

「ふむ、どうやらこちらとそちらで認識に食い違いがあるようです

な」

「食い違いですか？」

「はい、お聞きしますが劉備殿、あなたは何故彼を天の御遣いとしたのですか？」

「そ、それは占いで」

「成る程では天の御遣いという言葉の意味について考えましたか？」

「え？」

考えてなかったらしい、見れば軍師の二人は気づいたようだが武将連中はまだ気づいていない。

「天の御遣い、それはつまり天より来たりし者です。さてここで問題ですがこの国にはもう一人天より来たことを示す御方がおります、誰だと思いますか？」

「……天子様」

「はい、その通りです」

問いかけに答えたのは軍師の一人諸葛亮、それに周りの者達の顔色が変わる。

「天の御遣いを名乗るということは即ち自らを天子様、つまり皇帝陛下と同格であると宣言するのと同義」

「そ、それは」

「更に、貴女は先程天の御遣いの名を占いという不確かなもので決めたと言いました。皇帝陛下と同格の名をたかが占いでです」

「あ、あう」

「実に皇帝陛下を軽んじた行いです、このまま貴女を初めここにいる全員が斬首となっても文句は言えませんか？」

「そ、そんな」

ざわざわと部屋の空気が重くなる、個人的にはこのまま斬首でもいいのだが廬植には借りがあるので不満ではあるが助け舟を出す、

「まあ彼が天の御遣いと名乗るのを止めればまだ大丈夫でしょう」

「本当か！？」

反応したのは北郷、まあ現代人だしたらいきなり天の御遣いなんぞにされて斬首とかたまったもんじゃないだろう。

「幸いあなた方にはまだ実績がありません、ですのでこの時点で貴方が天の御遣いという名を捨てればまだ救いはあるでしょう」

しかしこの場合また別の問題が発生する、真偽はともかく劉備は皇帝の一族だと主張している、そんな人物の上に何の実績もなく身元も定かではない人間を立たせるのは色々と拙い。まあその辺まで教える義理はないか。

「ああそうだ、危うく忘れるところでした」

そついい俺は懷から手紙を一つ取り出した。内容は、

「廬植殿からの手紙になります」

「先生からの!？」

これは素で忘れていた、自己紹介後に渡すつもりだったのだが天の御遣いのことで忘れていた。因みに先ほど渡した推薦状と違い普通の手紙だ。

「では私はここで、正式に働くのは明日からでよろしいですか？」

「あ、はい、それでかまいません」

「かしこまりました、ではまた後日」

そう言い劉備達の部屋から退室する、さて明日からがんばるか。

side 北郷

あの趙政という男が退室して部屋値中は一気に騒がしくなった。特に愛紗がまさに怒髪天と言っていいくらい鬼気迫っている。

「いったい何なのだあの男は!？」

「あわわわ、愛紗さん落ち着いてくだしやい」

何とか愛紗をなだめようと雛里が奮闘しているが自分が噛むばかり

である。そんな中ずっと黙って手紙をよんでいた桃香がすつとんきよな声を出した。

「どうしたんだ桃香？」

「ご、ご主人様どうしよう」

あわあわと慌てている桃香、要領を得ない桃香の言動に朱里が声をかけた。

「桃香様、手紙には何と？」

「え、えっと」

桃香の師からの手紙、内容はこう書かれていた。

『よう桃香元気にしてるか？ 最近おまえがやっと職に就いたと聞いて安心したよ。その祝いつてわけじゃないが人手不足だろうおまえに優秀な文官を送る。陛下がまだ皇子だった頃からの教育係だった奴だ、陛下のお気に入りでもあるから仲良くなつて損はない。だが絶対に敵対するなよ、あいつが本気を出せばお前を始めた配下全員の首が比喻なしにとぶ、いいかくれぐれも気をつける 廬植』

陛下のお気に入り、首が飛ぶ。ははは、これって詰んでないか？

四話（後書き）

別に劉備達が嫌いなわけではないよ？

五話（前書き）

エントロピーが変換できない

五話

さてここで働くようになって一週間が過ぎた。仕事仲間である文官たちは勿論だが意外なことに俺がここで一番仲がよいのは北郷だったりする、俺としてはしかるべき敬意を払うならそれ以上突っかかる理由もなく北郷もプレッシャーに感じていたらしい天の御遣いをやらなくて済むとのことだ。そんなこんなで仕事のミスをきつかけに話すようになり、一緒に飯を食ったりしている。逆に仲が悪いのはこの上位陣である、趙雲とかはまだましなのだが関羽あたりが凄く睨んでくる、まあ実害はないので放っている。劉備に関しては、

「ではこちらが劉備殿と北郷殿の印が必要な物になります」

ドサツと音を立て竹管の山を机に乗せる、片腕で運べる量ではないが箆を使えばいい、逆に言えばそれだけの量があるということだ。

「え、えつとこれ全部ですか？」

「勿論です、これでもより分けてますから一切手伝いませんので」

「が、がんばろう桃香」

「はい、頑張ってください」

まあ普通だろうか？ 今一つ緊張感が足りない気がするがそこは自分でどうにかしてもらわないとな。

仕事も一段落し諸葛亮と鳳統に竹管を山と渡し暇になった俺は庭にいた。手には愛用の鉄鞭、まだ片手では満足に使えないためこう

して暇を見つけては木人相手に鍛錬しているのだ。

「しっ」

手、腕、首、頭の順に打っていくがどうにもしっくりこない。相手が木人ということもあるのだろうがやはり片腕がないというのは色々と不便である。

「ふむ、左右の感覚がまだ微妙か」

いやはやそうそう戦うことはないと思うがこれは少し拙いか、

「趙政殿？」

「む？ これは関羽殿」

と、一通り木人をしばいたところで関羽が現れる。みるみる眉間に皺が寄っていくがまあいつものことである。

「このようなところで何を？」

「見ての通り運動です。机仕事ばかりではなまりますからな」

「ほう、感心だな。ならば私が相手をしてやろう」

「ふむ、それもいいかもしれませんね」

因みに勝率は0である。まあ全力全開なら引き分けくらいにはいけるけどな。

「良い度胸だ」

「ハッハッハ、といっても仕事に関わるのであまり痛めつけられても困りますがね」

とりあえず防御に徹する、鞭は武器を逸らすためだけに使い一挙動を観察する。それでもまあ十合くらいかな？

「いくぞ！」

「……」

返事をする余裕はない、唐竹に振るわれた一撃に側面から鞭をぶちあて反動を利用し体を捻ることかわす、

「やるじゃないか！」

「っ！」

斬り上げをバックステップでよけ薙払いを蹴り上げて軌道を逸らす。なんとかかわしたが体勢も崩れた。

「貰った！」

「なんの！」

振り下ろしを足で蹴り払う、ミシッと嫌な音がしたが折れてはいない、あくまで折れてないだけだが。

「くっ」

関羽の体が泳ぐが追撃なんぞできん、てか足が痛い。

「ここまでですね、降参です」

「チッ」

舌打ちしやがったよこの人、いやしかし良い運動になったものだ。

「予想では最初の一撃で終わるはずだったんだが」

「文官だからって侮りすぎです」

いやまあ俺自身文官っていうカテゴリーでは上位にはいるけどね。
昔（皇帝時代）は項羽にも勝ったことあるんだけどなあ、

「……すまなかったな」

「いえいえ幸い折れてはないようですし」

「そつちじゃない」

はて？ ほかに何かあつただろうか？

「お前が来たときの事だ、よく考えれば尤もなことだ。皇帝陛下と同格をうたうなど漢王朝の臣として恥ずべき行為だ」

「そうですね」

「ご主人様は素晴らしい方だ、それは例えば天の御遣いという名がなくなっても変わらない」

「そうですか」

惚気はよそでやってくれ、てかあれだ、なんかだんだん痛くなってきた。

「私たちは危うくそのご主人様を窮地に立たせるところだった、だから礼を言う」

「そうですか、ところでそろそろ痛みが洒落の領域を越えて来たので行っていいですか？」

ヤバいマジで痛い、これは罅でも入ったか？

「大丈夫か？」

「わかりません」

因みに大丈夫でした。

さて、先の関羽との一件もあり徐々に劉備の配下の武将とも打ち解けてきた頃その知らせはやってきた。

「董卓討つべし、ですか」

届いた檄文には要約すれば洛陽で董卓が皇帝陛下を傀儡にして暴政をしている、今こそ一丸となって董卓討つべしと書かれていた。何というか、

「実にくだらないですな」

「ではそこに書かれている事は嘘ということですか？」

「ですな、というか董卓殿にはお会いしたことがございますが暴政がしけるような人ではないですな」

「なら俺達がとるべきなのは」

「二つですな、一つは洛陽に赴き董卓殿と共に戦う道、もう一つは日和見です」

「趙政さんは」

「とりあえず荷物を纏めてきます」

いくのは確定している。

しかしエン紹か、まだ懲りてなかったらしいな。いいだろう、今度は徹底的にだ！

五話（後書き）

感想待ってるぜ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532m/>

皇帝再起

2011年7月8日05時11分発行